

沖縄いきものマスタ-

増える外来種 変わりゆく生態系

1960年ごろ

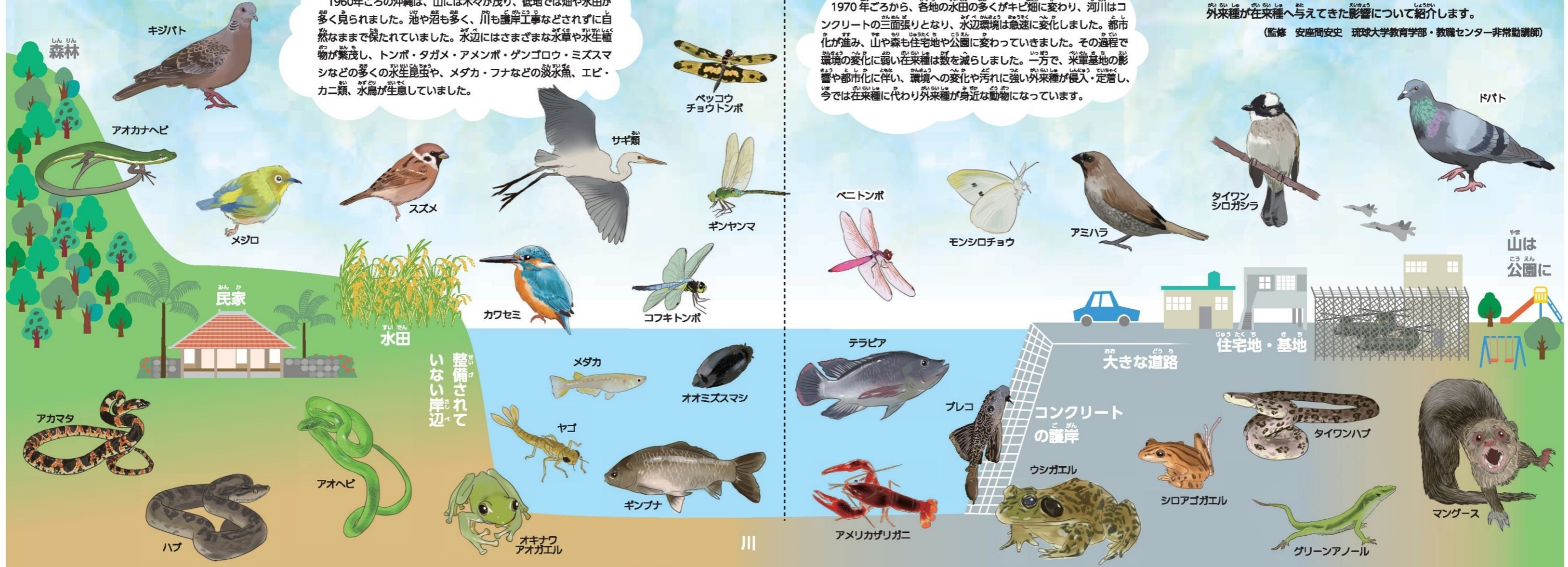
1960年ごろの沖縄は、山には木々が茂り、低地では畑や水田が多く見られました。池や沼も多く、川も護岸工事などされずに自然なままで保たれていました。水辺にはさまざまな水草や水生植物が繁茂し、トンボ・タガメ・アメンボ・ゲンゴロウ・ミスズメなどの多くの水生昆虫や、メダカ・フナなどの淡水魚、エビ・カニ類、水鳥が生息していました。

現在

1970年ごろから、各地の水田の多くがキビ畑に変わり、河川はコンクリートの三面張りとなり、水辺環境は急速に変化しました。都市化が進み、山や森も住宅地や公園に変わっていきました。その過程で環境の変化に弱い在来種は数を減らしました。一方で、米軍基地の影響や都市化に伴い、環境への変化や汚れに強い外来種が侵入・定着し、今では在来種に代わり外来種が身近な動物になっています。

沖縄県は奄美群島から台湾まで連なる琉球列島に生まれ、地形や地質、土壌、植生などそれぞれ個性のある島々からなります。これらの島々では独自に進化した動植物たちが、やはり独自の生態系をつくってきました。しかし現在、それらの生態系は開発に加えて、よそから持ち込まれた外来種により深刻な影響を受けています。外来種の侵入は復帰後著しく増加し、私たちの周囲の身近な生き物たちが復帰前(1960年ごろ)と現在では大きく変化してしまいました。ここでは外来種が在来種へ与えてきた影響について紹介します。

(監修 安座間安史 琉球大学教育学部・教職センター非常勤講師)



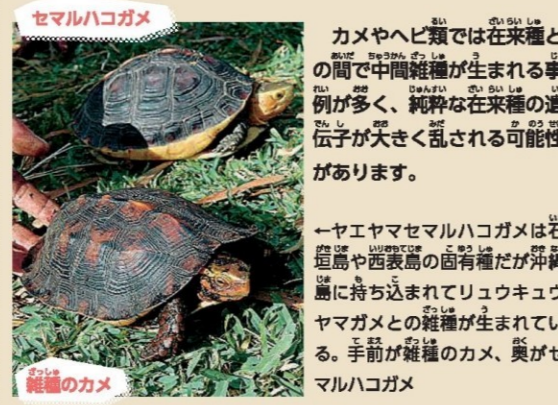
捕食

外来種が肉食動物の場合、在来種を食べしてしまうという直接の被害があります。



外来種が在来種に与える主な影響

遺伝子かく乱



人への危害



農作物への被害



生存競争



制作・仲本文子(デザイングループ)、熊谷樹(NIE推進室) ※CuiCui.のアートカレンダーは休みました